Eureka VI

六年制通信　No. 14　　平成 30 年 9 月 7 日（金）号

Alexandra の愛称

あまりの暑さにボウフラの段階でダウンしたのでしょうか。蚊に刺されなかった初めての夏休みも終わりました。夏の終わりを告げる物悲しいツクツクボウシの声もほとんど耳にしなかった。異常な夏でした。おそらく「あぁ、涼しい」と感じるのはとてもとても短くて、気がついたらとってもとっても寒い日になっていることでしょう。

夏前に立てた読書計画は、いつものように達成はできませんでしたが、暑さのせいで部屋にこもっている時間が長く、例年よりはうんと読めたように思います。モームの短編（『雨』『赤毛』『コスモポリタンズ』は特に面白かった）やポーなど、実は再読かあるいは三読みたいなものなのですが、若い頃に読んだ時よりよほど楽しめました。原文と照らし合わせて読んだものをありますが、これはもう自分の実力のなさを思い知らされるばかりで、とても楽しむどころではなかったな。読みながら皆さんにおすすめしようと思ったのを一つ挙げるなら、ダントツで太宰治の『畜犬談』です。20 ページほどの短編で、新潮文庫の『きりぎりす』に入っています。太宰は文章の達人だと私は思うのですが、『人間失格』が有名すぎて非常に暗いイメージがありますね。『畜犬談』は犬に恐怖感を持つ主人公のお話ですが、ユーモアあふれる描写と達意の文章が楽しめます。なんべん笑ったか。こういう作品は日本には少ないと思いますし、太宰に漠然と抱いている印象が変わるかもしれませんよ。ぜひ読んでごらん。

さて、もう一冊、読んで笑った、あるいは笑いごとではなくなった本があります。AI 搭載のロボットが東大受験に受かるかという話を聞いたことがあるでしょう。その人工知能プロジェクトを始めた新井紀子さんが書いた『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』です。数学者として、AI の本当の姿、つまり巷間囁かれている「AI が人類を滅ぼす」とか「AI が人類の仕事を奪う」「2045 年問題」といった話を冷静に正しく批判しています。ただ、AI の弱点である「意味を理解する」ことが、実は私たち人類も苦手になってきているのではないかというレポートが、本の後半にありまして、これを読むと笑えるのですが同時に暗澹とした気持ちにもなると、そういうわけです。

AI でできてしまう仕事がある以上、人間の仕事が少なくなっていく。しかし AI の弱点である「意味の理解」が人間の強みである限り、人間ならではの仕事は残り、そこに私たちの生きる道筋がある。しかし、もし人間が AI と同程度の読解力しか持たないのであれば、人間の生きる道がなくなるのではないか、これが新井さんの問題意識です。それで、日本人の中高生、あるいは大学生が、教科書の文章をどの程度読解できているかの調査をしたわけです。これが、かなり、まずい。

実際に中高生を対象に調べたものを少し見てみましょう。上記の本から拝借します。

問　次の文を読みなさい。

「Alex は男性にも女性にも使われる名前で、女性の名 Alexandra の愛称であるが、男性の名 Alexander の愛称でもある。」

この文脈において、以下の文中の空欄にあてはまる最も適当なものを選択肢のうちから一つ選びなさい。

Alexandra の愛称は（　　　）である。

①　Alex　②　Alexander　③　男性　④　女性

この問題に正答したのは、全国の中学生で 38%、高校生で 65%でした。みなさんできましたか。答えはもちろん①です。中学生の三人に一人がこの問題を読み取れないとするならば、これは深刻ですよね。では、これはどうでしょう。

問　次の文を読みなさい。

「アミラーゼという酵素はグルコースがつながってできたデンプンを分解するが、同じグルコースからできていても、形が違うセルロースは分解できない。」

この文脈において、以下の文中の空欄にあてはまる最も適当なものを選択肢のうちから一つ選びなさい。

セルロースは（　　　）と形が違う。

①　デンプン　②　アミラーゼ　③　グルコース　④　酵素

この問題は、知的な仕事に従事しているはずの大人でもかなりの割合で③を選んだそうです。答えは当然①ですよね。みなさんは即答できたでしょうか。本書にはもっと詳しく、さまざまな例題が示され、分析も行われていますから、興味のある人は読んでごらんなさい。

では、読解力はどのように養われるのでしょうか。新井さんの調査では、読解力と読書や学習時間、あるいはスマホを使っているかどうかには相関関係が見られなかったそうです。ほんまかいな。しかし、彼女は考えます。ひょっとしたらアンケートが読解できていなかったのではないかと。もはやブラックジョークみたいですけどね。

さてさて、文章を読む力をどうつけるかですが、私も特効薬のようなものは示せません。しかし、昔、恩師とこのことについて話したことがあるので恩師の言葉を紹介します。先生は、はっきり、読解力の基礎にあるのは読書量だと言い切られました。「読んでも読解力が身につかない」のではなく「読解力が身につくほどの量を読んでいないだけだ」と。それと、外国語の勉強がいいと。ただし、精読すること。「だいたいわかる」や「なんとなくわかる」は「全くわかっていない」のと同じことで、正確に「はっきりとわかる」まで深く読むこと。英語でも a 一つを注意深く読む姿勢が何よりも大切だと、そうおっしゃいました。外国語の精読は、いい加減に読む姿勢を受けつけません。辞書も引かずに精読はできません。時間をかけて考えることになります。そして、外国語を精読する過程で、実は日本語との格闘をしているのです。それが私たちの日本語を鍛えてくれる。先生はそう言われました。

これは、読解力養成の一つの大きなヒントではないかと私は考えます。